新選創作童話 18

ペイちゃんとマリエ先生

服部公一・作／鈴木義治・絵

著者紹介

服部 公一（はっとり こういち）

1933年山形県に生まれる。作曲を中田喜直に師事。64年アメリカに留学しミシガン州立大学を中心に地域社会の音楽を研究。65年日本レコード大賞童謡賞受賞。現在作曲家音楽評論家としてテレビ新聞雑誌などで活躍。童謡曲集『おじさんの子守歌』著書『あなたとくらしと音楽と』などがある。

現住所 〒107 東京都港区赤坂6－10－45 ビラ赤坂601

画家紹介

鈴木 義治（すずき よしはる）

1913年横浜に生まれる。川端画学校卒。宮本三郎に師事。画家。1954年二科会出品受賞。その後ひきつづき炷玄会、三軌会に出品受賞。その後、在野活動にはいる。『コタンの口笛』で、はじめて出版美術の仕事をてがけ今日に至る。その風格のあるユニークな画風は児童出版美術界においてもきわめて評価が高く、毎日出版文化賞、サンケイ児童出版文化賞、小学館絵画賞を受賞。

現住所 〒235 横浜市磯子区中原 4－24－20

913

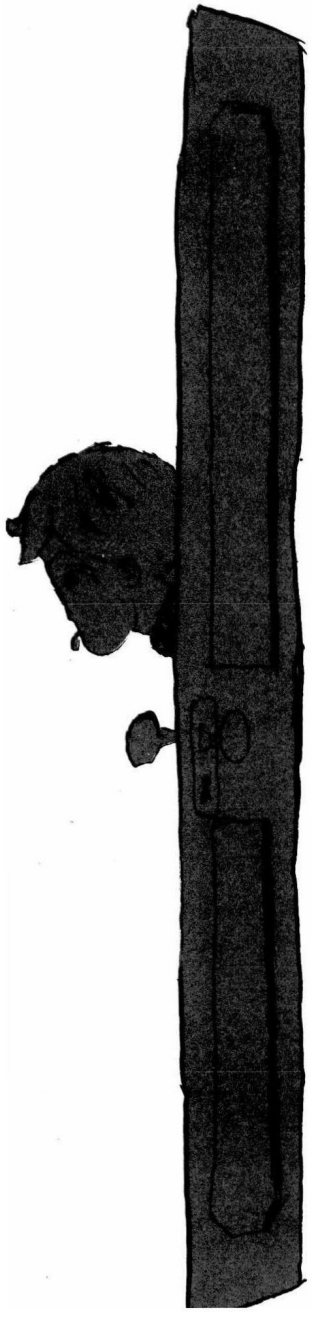
服部公一
ペイちゃんとマリエ先生
国土社 1972
78P 21cm×19cm（新選創作童話 18）

基本カード記載例

©新選創作童話 18 ペイちゃんとマリエ先生 〈検印廃止〉

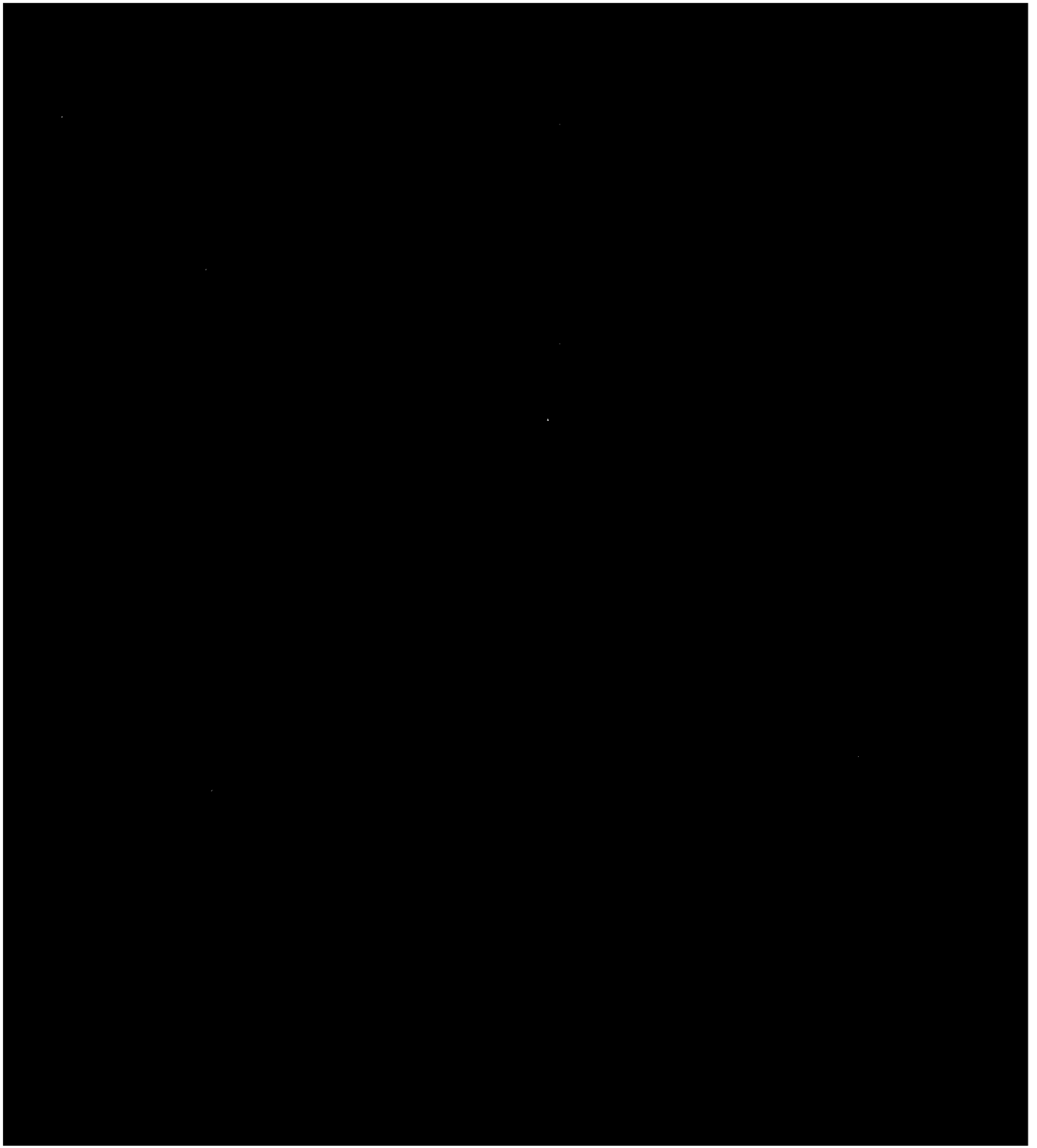
初版発行 1972年4月10日 3版発行 1976年9月25日 印刷 株式会社厚徳社
＊著者 服部公一（はっとりこういち） ＊発行者 長宗泰造 ＊発行所 株式会社国土社
東京都文京区目白台1－17－6 〒112 電話（943）3721(代) 振替 東京6-90631

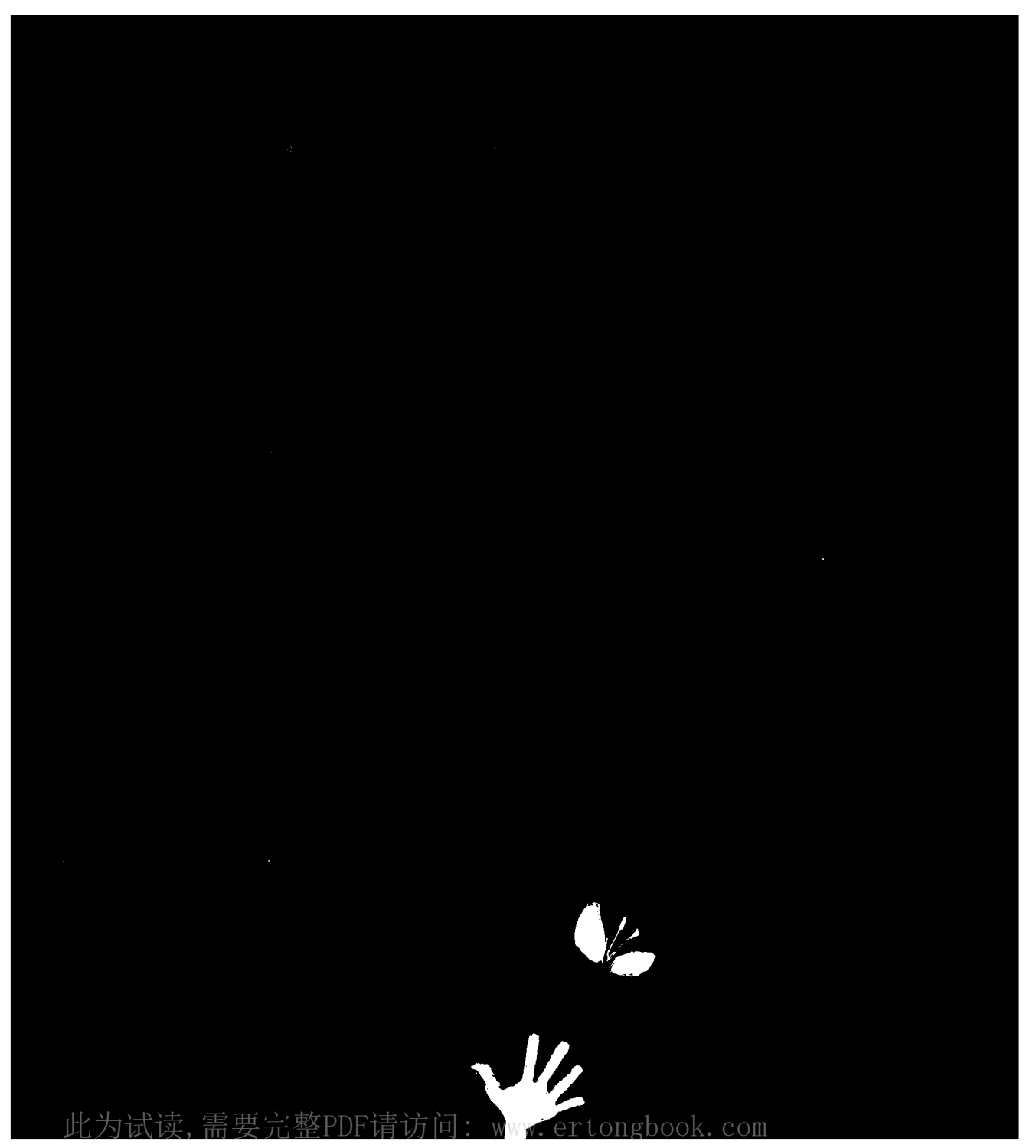
乱丁・落丁はおとりかえします



ペイちゃんとマリエ先生（せんせい）

服部公一・作
鈴木義治・絵





此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぼく　ペイちゃん

ぼくは　小学校の　三年生、名まえは　小山新平という。

名まえから　かんがえると　小さな　男の子だと　おもうかもしれないが　一メートル三十センチ　あるから　けっして　ちびではない。

ひょろひょろっとした　せいたかのっぽの　からだの　上に　まんまるい　かおが　のっかっている。

だから　ぼくのことを〝まめもやし〟って　いうやつが　いる。これは　おとなに　おおい。だけど〝まめもやし〟って　よばれるのは　きらいだ。

なかよしの　ともだちは　ぼくを〝ペイちゃん〟って　よぶ。新平の平から　きた　ぼくの　あだ名だ。このほうが　ぼくは　ずっと　すきだ。

なんで　このほうが　すきかって　きかれても　うまく　せつめい

できないけれど〝ペイちゃん〟って　いわれると　なんだか　ほんとうの　ともだちから　なかよくしてもらっているみたいな　気もちに　なるんだ。

こんなことを　いうと、ぼくには　たくさん　なかよしが　いるみたいだけど　そうではない。

もちろん　学校の　なかまなんかで　ふつうに　なかのいい子は　たくさん　いるけれど、ほんとの　なかよしと　いわれると、団地の　四かいに　いる　ヒロジくんや、大どおりの　かどの　ちゅうか料理屋の　マサオくんなどしか　ぼくには　ともだちは　いないようだ。

ほかの　男の子みたいに、ガールフレンドも　いない。きょねんは　同級の　レイコちゃんが　ぼくの　ガールフレンドみたいだった。だけど、レイコちゃんが　美人なので　ほかの　男の子が　レイコちゃんに　なかよくしてもらいたくて、マンガの　ふろくを　あげたりなんかして、ごますりばかりする。そうすると、レイコちゃんも　うれしそうな　かおをする。

そういうのを　みていると　ぼくは　おもしろくなくなって　ある日、

レイコちゃんに、
「いろんな　男の子と　つきあうなんて、レイコちゃんは　うわきだね……」
っていった。そしたら、
「男の子のほうが　みんな　あたしのほうに　よってくるんだもの。あたしのせいじゃないわ。それに　うわきなんて　いやらしいこと　いうわね。へんな　テレビばんぐみで　おぼえたんでしょ。ペイちゃんこそ、やきもちやきって　いうんだわ。もう　あそんであげないからっ……」
っていって、それから　けんかになって　ぼくの　ガールフレンドみたいじゃ　なくなってしまった。
　ぼくは　どうも　ともだちを　つくるのが　へたなようだ。
　そうだ、わすれてた。もうひとり　なかよしだった人が　いる。もしかすると　ぼくの　いちばんの　なかよしだったかもしれない。
　それは　となりの　二かいに　いる　ジローさんだ。ジローさんは、ほんとうは、二十五さいくらいなのだそうだけど、もっと　ずっと　おじさんに　みえる。

「くろうしたから　ふけて　みえるのさ……」
って、じぶんでも　いっていた。
　ちびのくせに　とっても　おしゃれで、あかい　チョッキを　きたり、きんいろの　とけいを　したりしているし、おへやには　ステレオがあって、そこに　あそびに　いくと、いろいろ　ジャズの　レコードなんか　きかしてくれた。
　しごとは　いったい　なにを　しているのか　わからない。たいていおひるごろ　おきて、夕方から　どこかへ　でかけていく。
　すこし　いなかべんで　へんな　ことばだけど　とっても　やさしい人で　ときどき　大どおりの　かどの　マサオくんの　ちゅうか料理屋で　ラーメンを　おごってくれた。
　こないだは、そのことで　ぼくは　うちの　おばあちゃんに　うんとしかられた。
「あんな　バーテンふぜいの　男と　つきあうんじゃありません。教育てきに　よくないのよ、ああいう　夜の　しょうばいの人は。それにラーメンを　おごってもらうなんて　とんでもない。そんな　いやらし

いことを　しては　いけない。ラーメンなら　あたしが　じょうとうの
を　つくってあげる。もう　あの人と　つきあうのは　いけませんよ」
って　いったから、いまは　ジローさんの　へやに　あそびに　いかな
いことに　している。

ぼくの　家は　東京の　いなかだ。新宿から　小田急線に　のって
ゆりがおかで　おりて、そこから　また　あるいて　二十分ぐらい　か
かる。

ここには　大きな　団地が　あるけど、ぼくの　家は　団地ではない。
団地の　うらのほうの　ぼろっちい　家だ。へやが　六つも　あって
大きい　家だが、すんでいる人は　たった　三人だ。

ぼくと、ぼくの　おじいちゃんと、おばあちゃんだ。おじいちゃんは
画家で、ずっと　せんから　ここに　すんでいるんだそうだ。

おじいちゃんは、小山晩山って　いうんだ。晩の山なんて　まっくら
で　なんにも　みえなくて、へんな　名まえだと　おもうけど　おじい
ちゃんに　いわせると、はかりしれないほど　おくふかくて　とっても

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いい　名まえなんだそうだ。

いつも　おくの　おざしきの　まんなかに　ひモーセン――つまり、あかい　もうふなんだけど――を　しいて、その上に　紙を　ひろげて絵を　かいている。

おじいちゃんの　かく　絵は、雲と　山と　川と　橋の　絵に　きまっている。たてながの　ひょろながい　紙に　上のほうから　雲と　山と　川を　かき、川の　まんなかへんに　小さな　橋を　かける。その橋の　上に　人が　いるときも　あるし、いないときも　ある。そしてたいていは　くろい　えのぐばかりで　かく。

たまに　ほかの　いろを　つかうことも　あるけれど、ほんの　ちょびっとだ。

だけど　おとなってのは　ふしぎだ。あんな　まっくろな　絵を、「晩山先生の　こんどの　絵は、しょうがいの　けっさくですな。ハハハ……」

なんて　いって　よろこんで　かっていく　おじさんが　いるんだから。

おばあちゃんは　小山キエという　名まえだ。

ぼくは　ともだちに　おばあちゃんの　名まえを　いうのが　きらいだ。だって、おばあちゃんの　名まえを　いうと　いつも　ともだちは、「キエーッ！　キエーッ、おれは　少年にんじゃだぞ……」なんて　いうんだもの。どうして　少年にんじゃの　かけ声と　にたへんな　名まえを　おばあちゃんの　おとうさんは　つけたのだろう。

おばあちゃんは　むかし　音楽学校で　バイオリンを　べんきょうしたのだそうだ。いまでも　テレビで　バイオリンを　やっていると、くびを　こっくり　こっくり　やって、ちょうしを　あわせながら、たのしそうに　きいている。

おじいちゃんが　べんきょうしていた　美術学校の　となりに　音楽学校が　あって、それで　しりあったのだそうだ。だから、おばあちゃんは　むかし　おじいちゃんの　ガールフレンドだったって　いうわけなんだ。

「じゃ　おばあちゃんと　おじいちゃんは　れんあいけっこんなんだね」って　おばあちゃんに　きいたら、すこし　こまったような　かおをして、

「いいえ、とんでもない。あたしたちは　そんな　ふしだらなことは　しなかったのよ」
っていった。
　ふしだらっていうのは　どういうことか　わからないけれど、あんまり　きいちゃ　わるそうだったから、それいじょう　きくのは　やめた。
　ぼくの　おとうさんと　おかあさんのことを　はなすのは、どうも　よわいんだ。どうしてかっていうと、ぼくと　いっしょに　いないからさ。
　おとうさんと　おかあさんは　りこんしたのだ。
「いろいろ　ふくざつな　じじょうが　あってね、おまえの　おとうさんと　おかあさんとは　りこんしたのよ。そのことに　ついては、おまえが　おとなになってから　くわしく　はなしてあげるからね……」
　おばあちゃんは　このはなしを　するとき、なきそうな　かおをする。そのかおを　みていると、なんだか　おばあちゃんが　かわいそうだから、このことも　もう　それいじょう　きくのは　やめにした。
　とにかく　ぼくは　おかあさんのことは　ぜんぜん　しらない。そし

て、おとうさんは　いま　シンガポールに　いる。名まえは　小山量平。ぼうえきがいしゃに　つとめていて、ざい木を　きって　かってくるしごとなんだって。そうだな、一年に　いちどぐらいは　東京に　かえってくる。

おとうさんが　かえってくると　とても　うれしい。ぎんざの　レストランに　つれていって　おいしい　ハンバーグを　おごってくれるし、きっさてんで　とっても　大きい　いちごの　がばがば　はいった　シヨートケーキを　たべさせてもくれる。

もうせん、ぎんざに　いったときのことだ。

「新平くん、わるいけど　ちょいと　一けん　つきあってくれないか」

って　おとうさんが　いった。

おとうさんの　そのいいかたが　おとなに　いうような　いいかただった。ぼくは　そんなふうに　いわれたのは　はじめてだったし、ものすごく　うれしかったので、男どうしの　たのみなら　なんでも　きいてあげるぞって　気もちになって、

「ああ　いいよ。どこへでも　いくよ」

って　ぼくも　おとなみたいに　いったんだ。

ネオンが　たくさん　ついている　ビルの　かいだんを　おりていくと　地下に　おさけを　のむ　おみせが　あった。ながい　テーブルのまえに　ならんだ　すっごく　せいたかのっぽの　こしかけに　よっこらしょっと　のぼり、ぼくは　おとうさんと　ならんで　すわった。

おとうさんは　ウィスキーを　のみ、ぼくは　レモンジュースを　たのんだ。

とっても　よいにおいのする　こうすいを　つけた　おねえさんが　わきに　やってきて、おとうさんと　ぼくの　せわをしてくれた。ぼくは　いままで、こんな　よいにおいを　かいだことは　なかったし、こんな　きれいな　おねえさんを　みたことも　なかったので、ぼーっとしてきて、とても　たのしい　気ぶんだった。

そのばんは、ほんとうに　かっこいい　ばんだった。

ぎんざから、ゆりがおかまで　ハイヤーで　かえってきたんだ。その車は　外車で、ざせきには　白い　カバーが　してあり、ふかふかの車だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com